

2019. 6. 10

畑 啓之

淡山疎水・東播疎水 博物館の展示資料中に先人の願いを見た

江戸時代は農業経済であった。土地はあるのに水がない。仕方なく畑としての利用となっているが、水が引けさえすれば畑を生産性の高い水田に変えていくことができる。その水に対する強い願いの歴史がこの博物館（兵庫県稲美町）から伝わってくる。



以下には、着手に至らなかった江戸時代の計画に関する資料を示す。

淡山疎水・東播用水の歴史	
1737年 元文2	蛸草郷と印南新村で水争いが起き、以後、村々で水争いが多発する。
1749年 寛延2	姫路藩百姓一揆が起き、野谷新村庄屋などが処罰される。
1771年 明和8	神出東村の「某」が山田川疎水を立案する。
1826年 文政9	国岡新村的福田嘉左衛門が山田川から練部屋までの引水を姫路藩に出願する。
1868年 明治元	神出東村の藤本増右衛門が山田川疎水を測量する。

**山田川疎水の発案 1771年（明和8）**

“いなみ野台地”では、1600年代から新田が開発され、1700年頃には主な水源はすべて利用され、干ばつが続き、水争いが多発していました。

この時代に、明石藩神出庄東村の某（氏名不詳）が現地を調査し、山田川の中流（神戸市北区山田町）から取水し、雌岡山の麓（神戸市西区神出町）まで水を引き入れることを発案しました。

某は村の長たちに相談しました。しかし、大規模な工事であり、技術や資金が不足していることから計画を進めることができませんでした。

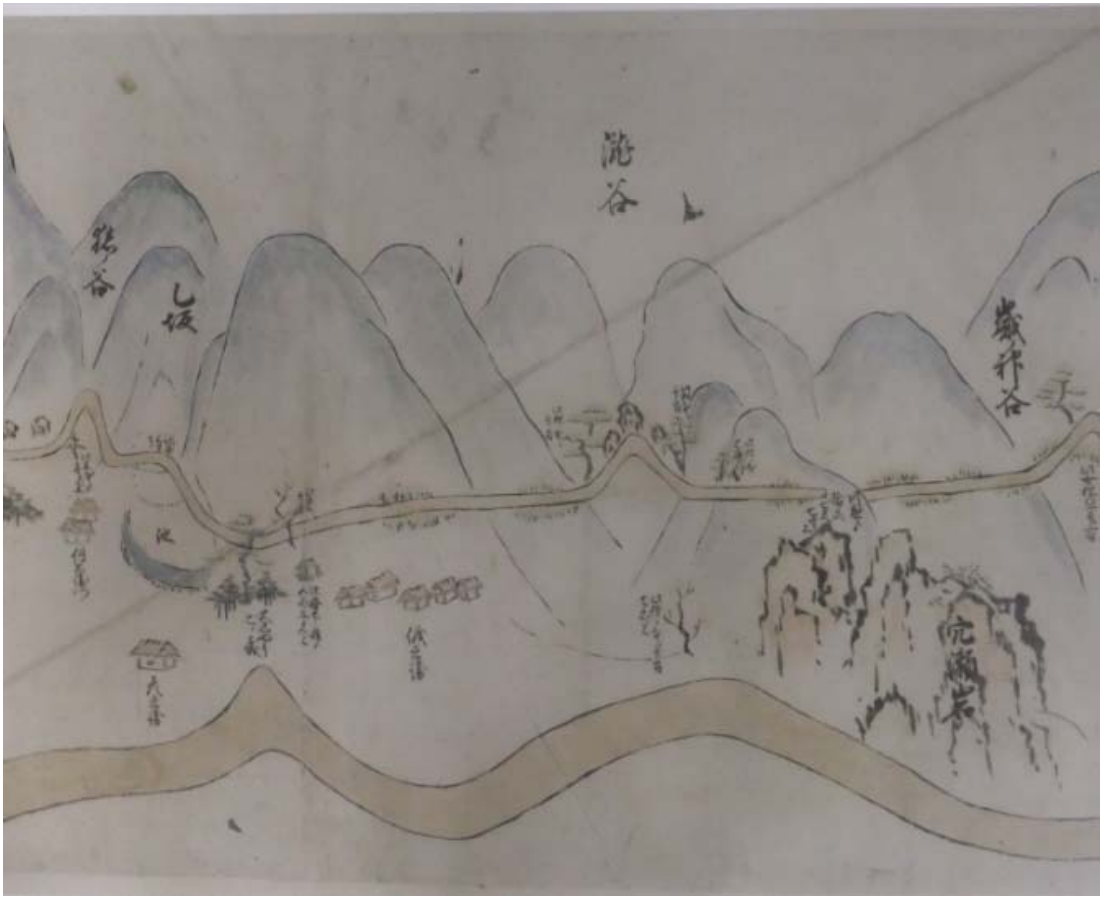
某が発案した山田川疎水の絵図は残されており、このコーナーに複写図を展示しています。

「某」は、明石藩神出庄東村（神戸市西区神出町）の「某」としか記されておらず、氏名不詳です。



右から左へ（西から東へ、流れは東から西）





左端が取水口



文政9年（1826年）の計画

本計画に関する文書は疎水博物館にはないとのことでした。

練部屋までの引水計画 1826年（文政9）

東村某の発案から55年後、国岡新村の福田嘉左衛門は、某の計画した水路を延長し、明石と加古郡の境に近い練部屋まで水を引き入れ、加古や神出庄などに水を送ることを考えました。水路の測量を何度も行ない計画書を作り、姫路藩に工事を願い出ました。

しかし、水源や水路が明石藩と大名領にわたるため、姫路藩だけでは決定できず廃案となりました。

明石藩 姫路藩 小野藩 旗本領 大名領 天領 入組支配領 公家領

現在の市町界と市町名